

<書 評>

## 大澤真幸 著 『ナショナリズムの由来』(講談社 2007年)

柴 山 桂 太

### I .

ナショナリズムは、現在もっとも盛んに研究される分野の一つである。だが、何をナショナリズムの本質と見なすのか、またなぜナショナリズムが近代社会において高まりを見せるのか、といった基本的な問題について、研究者の間でも統一的な見解は取れていないのが現状だ。

評者の関心は思想史にあるが、思想史の分野でナショナリズムは、自由主義との関連で議論されている。一般にナショナリズムは、自由主義と対立する思想と見なされている。例えばハイエクは、自由主義を「開かれた社会」の、ナショナリズムを「閉じた社会」の原理とした上で、後者を人間の原初的な部族感情に根を持つものだと批判的に位置づけていた(ハイエク『法・立法・自由』)。

だが、歴史を見る限り、この二つはそう簡単には区別できない。ハイエクのように、ナショナリズムを社会の退行現象と捉えるなら、なぜ近代で最初に進歩する文明を生んだ西欧で、ナショナリズムが最初に産声を上げたのか。ハイエクが理想とした十八世紀~十九世紀の西欧社会は、自由主義を発達させると同時に、人びとの「国民意識」をも発達させた。自由を支える法の体系は、まさに「ネーション」の歴史に基礎を持つものとして展開されたのである。

ナショナリズムは、文字通りに解釈すれば「ネーション nation」を作り出そうとする運動である。ネーションは、文化のまとまりをもった集団であり、日本語では場合によって「民族」や「国民」と訳し分けられる。ここで重要な

は、ネーションが、十九世紀の西欧においてはきわめて「進歩的」な理念であったという事実だ。というのも、それ以前の身分秩序とは異なり、ネーションの下ではすべての成員が立場上、平等であると考えられたからである。したがってナショナリズムは、単に文化的なまとまりを作り出そうとする動きだけでなく、政治的には国民の平等や、権利の水平化を生み出す進歩主義の理想を伴っていた。

また、ナショナリズムは、ネーションが国際政治の単位になるべきだという考え方も含んでいた。今日でも「インターナショナル international」という言葉で示されているように、世界は複数のネーションの対立と共存によって成り立っている、と考えられている。こうした意識は、まさに近代の産物だ。それぞれのネーションが、独自の主権を持つべきだとする「民族自決 national self-determination」の考えは、十九世紀にはヨーロッパで、二十世紀にはアジア・アフリカに拡大していく。西欧列強による帝国主義を終わらせたのは、六〇年代の一連の植民地ナショナリズムであった。

そのような開放的な理念を内包しているにもかかわらず、ナショナリズムに対する評判は、決して良いものとは言えない。日本でも西欧でもナショナリズムは、戦争の記憶を呼び起こすためである。これは、ナショナリズム研究の出自によるところが大きいと言えよう。西欧においてナショナリズムが生まれたのは十八世紀だが、本格的なナショナリズム研究が始まったのは二〇世紀、第一次大戦後のことであった。それ以前の戦争とは異なり、国民が主体となって戦う「総力戦 total war」への反省から、ナショナリズムは戦争を激化させる元凶として、批判的な研究対象となったのである。

今日の日本でも、ナショナリズムは否定的な言辞である。最近の日本でナショナリズムが再燃している、と言われるときイメージされているのは、日本の国民意識が、周辺諸国との摩擦を引き起こすほどに高まっているのでは、という懸念である。

だが、これは日本だけの現象ではない。東アジアを見ても、中国、台湾、韓国（朝鮮半島）で、ナショナリズムの高まりが見られるためだ。中国では、共

産主義の退潮に伴って、「愛国主義」が重要な社会の構成原理と見なされるようになった。台湾では、本土からの独立を求める運動が支持を広げ、下手をすれば軍事的な緊張を呼びかねない事態に発展している。韓国では、南北分断を超えた「民族」の統一国家を作ろうという運動が、現実の政治を動かし始めている。

東アジアだけでなく、別の地域を見てもナショナリズムの高まりは確認できる。旧ユーゴや、中央アジアのナショナリズムが何をもたらしたのか、改めて言うまでもない。そうだとすれば、現代はまさにナショナリズムが世界的な規模で再燃している時代だと位置づけることができるであろう。

これは、グローバル化に共通した現象だ。歴史家は、十九世紀末から第一次大戦前夜の時代に、世界経済の急速な統合が進んだことを指して、「第一期グローバリゼーション」の時代と呼んでいる。この時代は、同時にナショナリズムの高まりを生んだ時代でもあった。グローバリゼーションの時代にナショナリズムが各地で見られる（あるいは各国のナショナリティが再定義される）のは、決して目新しい現象ではない。

## Ⅱ .

なぜナショナリズムは近代社会において高まるのか。ナショナリズム研究者が挑戦してきたこの問題に、現代日本を代表する社会学者が挑んだのが本書『ナショナリズムの由来』である。八〇〇頁を超える分量をもち、密度の高い抽象的な文章が続く本書を正確に要約するのは難しい。評者なりの視点から、本書の内容をごく簡単にまとめておこう。

著者は、ナショナリズムを「普遍主義と特殊主義の交錯」という観点から説明している。一般に、ナショナリズムは、自らが属する特殊なネーション（国民文化）への拘泥を意味するものと捉えられがちであるが、それは事態の一面でしかない。一方でナショナリズムには近代主義の側面があり、身分からの解放や、権利の拡大などの正義を実現しようとする面ももっている。

これは言いかえると、啓蒙主義への志向がナショナリズムの核になっている、

ということだ。ところがそうした普遍的な規範が実現できるのは、あくまで国家の内部でしかない。普遍主義を目指す志向性が、多国家システムという現実の下では国内のネーションという範囲でしか まさに「国民の」権利としてしか 実現できない。その断念から生まれてくるのが、ナショナリズムだという説明である。つまり著者は、普遍主義への欲動を近代社会の基本線と捉えた上で、それが必然的にネーションという特殊主義的な共同体へと結晶化するロジックを解き明かそうとするのである。

歴史的に見てナショナリズムが、自由や平等といった近代的な価値の実現を目指す運動でもあったという点はさきほど確認した通りだ。したがって著者の言うとおり、ナショナリズムは啓蒙主義への反動というよりも、啓蒙主義の直接の帰結でもある。こうした観点に立つナショナリズム論を展開する論者に、ケドゥーリがいる。カントからロマン主義へと至る思想史を振り返りながら、ケドゥーリは、普遍的な「主体」の確立を目指す思想が、一九世紀のロマン主義の時代に入って、「民族」を希求する思想へと自然に変化していく歴史を鮮やかに描き出した(ケドゥーリ『ナショナリズム』)。

ケドゥーリが思想史において行ったことを、本書は社会学的に捉え直すものと言えるかもしれない。近代的な「主体」を構成する「規範」が、社会のいかなる条件によって生成し、また変容するのかに注目することで、ナショナリズムがなぜ啓蒙主義が全盛の十九世紀のヨーロッパで最初に古典的な完成を見たのか、その謎を明らかにするのである。

著者が導く結論はこうだ。ナショナリズムは、近代社会における「規範の虚無化」に対応した一種の心理的な防衛機制である。近代社会においては、自らが従うべき規範が、王のような具体的な身体性をはなれて極度に抽象化する。その抽象化した規範 著者の言葉で言えば「第三者の審級」 を担保するのが、ネーションという「想像の共同体」(アンダーソン)だ。「ネーション」に帰属していると感じることで、人ははじめて「規範の虚無化」に陥らずに済む、と解釈するのである。

普遍主義への無限の志向性(普遍的な規範の探求)が、いわば逆説的な仕方

で、特殊主義的な共同体へと折り返されるときに現れるのが、ナショナリズムである。それが著者の考えるナショナリズムの本質だ。ただ論理的に考えて、そこでの共同体がネーションでなければならない必然性はない。現に今日の世界では、国家を超えた宗教共同体（例えばイスラーム共同体）の実現を目指す復興運動が見られる。これは、ネーションを超える広がりを持つ規範を求める運動と解釈できよう。

それとは反対に、ネーションよりも下位にある「民族 ethnicity」に新たな規範を求める動きもある。例えばイギリスでは、スコットランド人が、もはやほとんどの人が話すことのできないゲール語の伝統を再評価し、駅の看板表示などに用いている例がある。これなどは「民族」的なアイデンティティの再評価の一例である。現代では、国家の内部にある国民を（民族的少数者も含めて）統合していく古典的ナショナリズムとはまったく逆に、エスニシティという小さな単位への分解を指向する新たなタイプのナショナリズムが生まれているのである。

本書の第二部で著者は、古典的ナショナリズムと現代的ナショナリズムを区別する。現代的ナショナリズムは、宗教復興運動や、エスニシティ運動など、これまで自明とされてきた「ネーション」を疑う新しいタイプのナショナリズムだ。規範が準拠する水準が、それなりの歴史の実体を備えた（とこれまで見なされてきた）国民共同体ではなく、ほとんど実体のない宗教共同体や、エスニック共同体に見いだされている。

なぜそのような事態が生じたのか。結論だけ単純化して述べれば、次のようになる。現代的ナショナリズムの特徴は、既存の「ネーション」に対して否定的なナショナリズムである。これは、既存の「ネーション」に対する帰属が、規範の正当性を保証するものではない、と意識される段階に現代社会が入っていることを物語る。それが、「ネーション」の解体・再編を伴う一連の運動を生んでいるというのが、本書の第二部の結論になる。

## Ⅲ .

以上に見てきたように、本書はナショナリズムを、「規範」の生成と変容という観点から分析するものである。社会において高次の「規範」を求める社会の自己運動 著者はそれを、資本主義に由来するものと捉えている が、古典的段階においては「ネーション」の肯定へと帰結し、現代的段階においてはむしろ「ネーション」への否定として現れてくる。こうした否定性を核とする現代的ナショナリズムの極端な形態としてあげられるのは、原理主義やファシズムである。本書の分析では、それらは必ずしもナショナリズムの例外的なケースではない。現代的な社会的条件の下では、どの国や地域でも起こりうる現象である、と説明される。

いずれにせよ、本書のナショナリズム理解は、ナショナリズムを単に特殊主義（他とは区別された自文化の特殊性を自明なものと見なす態度）と見るのではなく、むしろ普遍主義（自由や平等といった近代的な価値観の実現を希求する態度）の屈折した形態と見る点に、大きな特徴がある。その本質は古典的ナショナリズムも、現代的ナショナリズムも変わらない。

こうした立場から、著者はネーションの否定を安易に唱える昨今の「左派」に対して、批判的な立場に立つ。例えば「左派」は、ネーションに基礎をおくのではなく、民族的なマイノリティの権利を尊重した多文化主義の実現を目指す、それは危ういと著者は述べる。多文化主義は、国内の文化集団をつなぐ普遍的な規範を否定するという意味で、現代的なナショナリズム 否定性を核としたナショナリズム の一変種に過ぎないからである。それが既存の社会秩序（国民共同体）を解体し、最悪の文化／人種差別にまで行き着かないという保障はない。

他方で著者は、ネーションを肯定する「右派」の立場に対しても批判的だ。その理由は詳しく述べられていないが、忖度すれば、古典的なナショナリズムの段階はすでに過ぎ去ったという状況認識があるのであろう。一九世紀の古典的な段階とは違い、ナショナリズムはもはや進歩主義的な理念ではない。現代

において「ネーション」は、人びとの「規範」を担保するものとは意識されにくくなっているのだ。

したがって今日の社会でナショナリズムを唱えることは、「アイロニカルな没入」　すでに無価値だと知りながら、あえて没入してみせるシニカルな態度　でしかない、と著者は考える。ではどうすれば良いのか。本書の最終章は、まさにこの問題を扱っている。そこで描かれているのは、かつての世界宗教（主にキリスト教）が可能性として持っていた、独特の存在論的な倫理のありようだ。その論理的な可能性を予示して、八〇〇頁にも及ぶ本書の長い探求は終わる。

現代の、とりわけ現代日本のナショナリズムを「アイロニカルな没入」と一括りにして良いものなのか、評者には異論もある。だが、古典的なナショナリズムが規範を積極的に実現する共同体を目指したのに対して、現代的ナショナリズムにおいては、そのような規範が既存の「ネーション」共同体によっては実現されないという否定性が前面に出ている、という解釈は、海外の状況を見る限り、かなり妥当性のある解釈だと思われる。近年の（主にヨーロッパや北米で見られる）エスニック回帰の現象や、宗教原理主義、あるいはアンダーソンの言う「遠隔地ナショナリズム」（アメリカで、もはや本国とのつながりを失った移民の二世や三世が、自らの民族的ルーツに目覚める現象）などは、その典型であると言えよう。

ただ、現実の世界を見ると、今の世界的なナショナリズムの高まりには、古典的ナショナリズムの事例と解釈した方が良いと思われるものが多数見受けられる。例えば東アジアのナショナリズムだ。中国、台湾、韓国(朝鮮半島)は、いずれも古典的なナショナリズムのあり方に近いようにも見える。台湾にせよ韓国にせよ、単に既存の「ネーション」を否定する運動というよりは、それなりに歴史的な実体を持つ「ネーション」に基づいて新たな共同体を積極的に樹立しようとする運動であると解釈する方が自然ではないだろうか。

そうだとすると、現代世界には、古典的ナショナリズムと、現代的ナショナリズムが併存しているということになる。ではなぜ、ある地域のナショナリス

ムは前者の現れ方をし、別の地域では後者の現れ方をするのか。

著者の見立てでは、この二つのナショナリズムの違いは、資本主義の段階の相違と関連づけられる。ごく単純化して言えば、資本主義の初期段階においては古典的ナショナリズムが、後期段階には現代的ナショナリズムが、それぞれ対応している。だが、この説明でいくと、資本主義がある程度進んだ台湾や韓国でなぜ古典的ナショナリズムが見られ、逆に資本主義がまだ初期段階にあるはずの中東で（原理主義のような）現代的ナショナリズムが見られるのかが、分からなくなる。

現在、現代的なナショナリズムが強く見られる地域 既存の「ネーション」に否定的なナショナリズム は、ヨーロッパやアメリカ、中東地域などである。これらの地域は、「国民国家」の揺らぎが激しいという点に共通性があるようにも思える。EUのような「超国家 super-state」を形成する動き、アメリカのように「帝国 empire」への志向を強めている地域、あるいは中東のようにネーションを超えた「宗教共同体」への志向が回帰している地域と、いずれも既存の「ステート」が新たに再編される動きが見られる。

この見方がもし正しいとするなら、これらの地域での新たなナショナリズムは、そうした「ステート」の現代的な展開への対応であると解釈できるのではないか。つまり、「国民国家」に変わる新たな「統治形態 state, stateness」を模索する過程で、ナショナリズムの再定義が行われていると考えてみたくなるのである。

既存のナショナリズム研究は、ナショナリズムを産業社会や資本主義と結びつけて解釈する傾向が強い。ゲルナーやアンダーソンの研究はまさにそのような立場に立つものであり、両者の議論を発展させた本書もその延長線上に位置づける。だが、ナショナリズムが近代の「国民国家 nation-state」という統治形態の中で生み出されたという事実に目を向けるなら、「国民」の容れ物としての「国家」の歴史的展開 それは、資本主義の歴史とはさしあたり独立に考えられるべきものだ についても、視野を広げる必要がありそうだ。

「国民国家」は、西欧の長い歴史の中で生み出され、現代にあっては世界的



に採用されている統治形態であるが、今後もそうであるという保証はない。特に、西欧以外の地域で、「国民国家」とは異なる統治形態が生み出される可能性もある。「ステート（国家）」が新たな形をとれば、「ネーション」のあり方も変わってくる。「ステート」との関係という視点からナショナリズムを解釈するなら、「古典」から「現代」へのナショナリズムの変遷も違ったかたちで再考できるであろう。

そのように考えるとしても、本書が示した、古典的ナショナリズムと現代的ナショナリズムの区分の有効性は揺るがない。本書が開いた議論の射程をどのように受け継ぐのかは、今後のナショナリズム論にとっての大きな課題となる。